

題 『神の家族』

テキスト：マルコによる福音書3章31～35節

親愛なる皆さん、おはようございます！

今日の宣教の題は「神の家族」とつけました。

先週の「ベルゼブル論争」の時にイエスの身内の人たちが、病人の癒しや罪の赦しの宣言をしていたイエスが気が変になっているという噂を聞いて、イエスを取り押さえるためにナザレからカファルナウムの町まで来ました。

今日は、再びイエスの家族がナザレからやって来た場面です。

ナザレからカファルナウムまでの距離はおよそ10里、40K程と言われます。でこぼこ道を時速4Kで歩いて10時間ほどかかりそうです。かなりの距離です。それだけイエスの家族も心配だったのだと思います。

◆イエスの母、兄弟

31:イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスと呼ばせた。

イエスには10人ほどの血縁の兄弟姉妹がいたようです。

と言っても聖書によれば、イエスは、聖霊によってみごもったと言われます。

イエスは長男でした。父ヨセフの亡き後、長男のとして母マリアを支え、家の大黒柱として大工の仕事をし家族の生活を支えていたのです。

30歳ごろになって、預言者ヨハネの影響を受けて、神に従うべく故郷を離れヨハネの元に向います。その後、神の国の迫りを感じ洗礼者ヨハネからヨルダン川で洗礼を受けます。「あなたはわたしの愛する子」という神の声を聞き、神の国を伝える宣教、神の言葉と愛の癒し、奇跡を行っていました。

今よりずっと平均寿命の短い約2000年前の時代、30歳と言えばもう家続に対する責任は十分果たせたと言えるのかもしれませんが。出て行く方は、そうでも、出ていかれる側には頼るものが失われた失望感は残り続けると思います。この時は、イエスの母、マリアも迎えにやって来たのです。「人をやってイエスと呼ばせた。」家の中はいっぱいで入れなかったようです。血のつながりとはいいものだと思いますが、時に強制力を発揮し、窮屈に感じる人もいるでしょう。かつてわたしもその一人でした。

身内が「人をやってイエスと呼ばせた。」ということばに、わたしは、イエスに対する兄弟姉妹たちの思いを感じます。「どうしてわたしたちを、家を捨てた

のか。故郷を。」 残される方が寂しいといひます。

そうだと思います。

家の中には、イエスのそばに大勢の人たちがいてイエスの口から出るそのひと言ひと言を聞いていたのです。

32:大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄

弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と人々は家族が来たことをイエスに伝えます。

この後の、イエスの言葉が衝撃的です。

わたしは若い頃、初めてこの箇所を読んだとき、「イエスさま、何か冷たいな～」と思いました。

皆様はどうですか？

今日の宣教の題は「神の家族」とつけました。「血肉の家族」と「神の家族」のことを考えたいのです。

誰でも「血肉の家族」は大切です。その家族のことで喜んだり、時に苦しんだりするのは。しかし、地上を生きている限り、血肉の家族の家族関係は切れないのです。旧約聖書は、創世記から血肉の家族の物語です。神信仰を基本とする血のつながりの物語です。アダムとエバから始まり、アブラハム、イサク、ヤコブ物語、すべて血のつながり、部族の物語です。雑な言い方かもしれませんが、ユダヤ教は血のつながりで守られて来た宗教のように思えます。

旧約聖書のヨブのことを思ひます。ヨブは神への信仰篤い正しい人でした。ヨブは信仰の人で家族を大切にする人でした。

ヨブ記 1 章 1 ～ 5 節 (P 7 7 5)

1:ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。

2:七人の息子と三人の娘を持ち、

3:羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。

4:息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた。

5:この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。

ヨブはいつもこのようにした。

ヨブは、朝な夕ないつも子どもたちのことを思い続ける人でした。

この後、ヨブはサタン、悪魔から信仰を試みられます。ついに家族を失い、

富を失い、身体も弱り果ててしました。しかしヨブは、神に叫び、信じることを止めませんでした。

ヨブは正に神信仰に生きた人でした。

だれでも血のつながりに対しては責任があるのです。ですから人は苦しみ、喜びのです。わたしたちもそうです。

時至って、神さまに遣わされたイエスさまはどうでしょうか？

一見血のつながりである家族に冷たいように見えますが、

血のつながりに対しては責任を感じ、責任を果たされたのです。

30 歳まで懸命に家族を支えたのです。そして十字架につかれた死の間際には、自分亡き後の母マリアを案じ、弟子のヨハネに母マリアのことを託されたことがヨハネによる福音書 19 章 26 節 (P207) に記されています。伝説では、ヨハネは主イエスの言葉に従い、エルサレム、またエフェソにマリアのために住む家を見つけマリアはそこで生涯過ごしたと伝えられています。今ではその家は巡礼地とされています。

家の中で語られたイエスの言葉に、心の耳をすませましょう。

33:イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答えました。

主イエスは人の子イエスの面と神の子イエスの面を持っておられます。

宇宙万物を愛を持って創造された神は、独り子イエスをこの世に送られました。

全き愛をこの世に伝え与えるためです。また心細さの中にうめき、頼りになるものを持っていない人たちにご自身の身を用いて、神の全き愛をことばと行いで示されたのです。

この時、イエスのまわりには、どのような人たちがいたのでしょうか。

34:周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわ

たしの母、わたしの兄弟がいる。

わたしは、イエスの語られた山上の説教のことばを思うのです。

マタイによる福音書 5 章 3 節～

3:「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのもので

ある。」「貧しい人々とはどんな人か」頼るものを持たない心細い人たちのことと聞いたことがあります。自分を支える拠り所を持たない人たちのことです。そのような人たちが、今イエスのそばに座り込んでいたのです。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。

35:神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

神の愛の支配する国、場所ではこうなるのだと示されたのだと思えるのです。

「神の御心を行う人こそ、」と聞くと、何か、倫理的な道徳的な行いを思いませんが、何より神により頼み、神にすぎることです。そこから神さまの心になう行いが生まれるのです。心細さの中で、頼るものがない中でイエスの一言一言に心を向ける人たちは、この時イエスの家族となっているのです。その人たちは、愛と自由をもたらす聖霊の助けと導きによって、きっと神の愛の道具として用いられて行くのです。

わたしたちもそうです。たとえ血はつながっていなくても、血縁を超えて神さまと主イエスの愛に包まれて神の家族となって行くのです。これがイエスの新約聖書の教えなのです。

今ここに主イエスにある神の家族は生まれているのです。また各地に神の家族は生まれているのです。

みなさまの上に主の平安を祈ります。

◆イエスの母、兄弟

31:イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスと呼ばせた。

32:大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、

33:イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、

34:周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。

35:神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」